

書教育における「多様性」と「個性」を重視した指導の提案と実践

畠田優衣（東京大学 教育学研究科 大学院生）

【研究の背景と目的】

本研究の目的は、従来の書写教育とは異なる、児童が自己や他者の個性を実感するための、新しい毛筆書写教育実践を開発することにある。書写教育は、日常に応用のできる正しい文字を書くことを目的として行われてきた。しかし、時代の変化に対応するためには筆で文字を書くことの芸術的側面に注目することが必要である。その芸術的側面として「①多様なもの」かつ「②個性を発揮できるもの」という書の特徴に注目し、児童が多様な書に触れ作品を制作することを通して、自己や他者の個性に気づくことのできる新しい書写教育実践を開発する。

【研究 1 小学校書写指導における実践研究 ①～④】

- 目的** ①書の芸術的側面を盛り込んだ「創作的指導法」の効果を、「従来の指導法」との比較を通して検証する。
②「創作的指導法」を行う場合、どの学年がふさわしいか検証する。
③「創作的指導法」において「文字の多様な表現」「多様な過去の書体」のどちらを提示するのがよいか検証する。
④「創作的指導法」を経験した児童と、そうでない児童を比較する。
- 方法** ①小5の1学期の授業において、「創作的指導法」を施す実験クラスと「従来の指導法」を施す統制クラスに分けて授業を行い、学期初めと学期終わりに質問紙調査を行った。また作文を書いてもらった。
②小4と小6に対して同様の「創作的指導法」授業実践を行い、実践前後の質問紙に回答してもらった。
③小5の2学期において、2種類の「創作的指導法」実践を行い、その制作物を熟達者評定によって比較した。
④計4つの小学校で質問紙調査を実施した。
- 結果** ①「創作的指導法」によって児童は書に対する認識を変え、書の多様性や個性についても学習した。さらに「創作的指導法」の実施は、書に対する触発や自己評価の低下を防いだ。
②「創作的指導法」は6年生の書の認識をより多く変えたが、両学年ともに効果があったと言える。
③「文字の多様な表現」は創造性をより促し、「多様な過去の書体」は模倣をより促すことがわかった。しかしどちらの作品も創造性を高く評価され、どちらもふさわしいと判断された。
④「創作的指導法」を経験した児童は、経験していない児童よりも書へ興味を持ち、書は楽しく、緊張しないものだと考えていることが明らかになった。

【研究 2 小学校教員・教員志望の大学生に対する実践研究①②】

- 目的** 教師が持つ書の認識を変えるため「創作的指導法」を元にしたワークショップと授業実践を行い、効果を検証する。
- 方法** ①小学校教師に対するワークショップを行い、実践前後の質問紙調査を行った。
②教員養成課程の「書道」の授業で、実践的授業を行い、質問紙調査と事後インタビューを行った。
- 結果** 実践前後で参加者の書の認識は変わった。さらに、「個性」に着目して児童の作品を見ることができそうだとしたこと、他分野の教育に活かすことができそうだと感想を多く得た。

【研究 3 書領域の熟達者と非熟達者の書に対する意識調査①②】

- 目的** 従来の指導法を受けた非熟達者・中高生と、実際に創作を行っている熟達者の書の認識の違いを確かめ、「創作的指導法」の妥当性を検証する。
- 方法** ①書の熟達者(N=221)と、非熟達者(N=258)、中高生(N=258)に対して質問紙調査を実施した。
②書の熟達者(N=38)に、書の多様性や個性の発揮ができることに気付いた経験についてインタビューを行った。
- 結果** ①熟達者は、非熟達者・中高生に比べて、「形が何よりも大事」と考えておらず、「形以外に大事な要素がある」と考えており、書は創造的なものだ捉えていた。
②熟達者は、「師匠からの指導」「手本なしでの制作」を経て、「形以外の大事な要素」に気づくことが示唆された。

【総合考察】

「創作的指導法」はより熟達者の考え方に近い要素を持つ指導法である。それを小学生や教師に施すことにより、すでに持つ書のイメージを変えることがわかった。さらに、書の多様性を知り、自己や他者の個性に気づくことができた。字を書く機会が減り、さまざまなことがAIに取って代わられる今だからこそ、同じ文字を書いても百人百様の表現が可能で、個性を実感できる「書」を、創造的な芸術として捉える視点を養う毛筆書写教育に変革することが必要であるだろう。